

静脈業界を牽引するリーダー：白井美菜

第1回 まさか自分が父の会社で働くとは



今、私が働いている白井エコセンター株式会社は、産業廃棄物の収集運搬の会社で千代田区と足立区にオフィスを持ち、一般ごみ・廃プラスチック・金属くず等の産業廃棄物の回収・収集運搬からプラスチックリサイクル、ビル清掃などの事業を行っている。当社は廃棄物ビジネスを通じて都市のインフラの役割や持続可能な都市運営・産業振興の貢献を目指しており、最近IoTを活用し、廃棄物の契約からトレーサビリティ強化も行っている。

本来、白井エコセンターについて語るこの連載は、私の父であり、白井エコセンター前代表の白井徹が筆を執るはずであった。しかし、それはかなわなくなりました。今回、父のことを思い起こしながら白井エコセンターや今後について、僭越ながら娘である私が書いていこうと思う。

父は空手が好きで、思い立つと外のどこでも急に空手の型の一つであるサンチン体操をしたり、早朝5時からウクレレを弾いたり、近所では変わった愉快なおじさんと思われていた。

私の小さい頃、彼はいわゆる高級な外車を見つけると「美菜、屋根に乗れ」と言って写真を撮り、子供ながら私をひやひやさせた記憶がある。また時々、休日に私をトイザラスへ連れて行きおもちゃを買ってくれる父が大好きだったが、平日は私が起きている時間には帰ってこないため、父は別の家に住んでいると思っていた。私に「今度パパの家に遊びに行きたいから連れて行ってね」と言われた時は相当ショックを受けたらしい。子供の頃は娘に会う時間が少ないためか、嫌われないよう相当甘やかしていたみたいだ。

また歯磨きした後にジュースを飲まされ“大丈夫か!?”と思うこともあり、子供ながらに親の行動はちょっと疑っていた。



あまり会えない時代の父

父は仕事も遊びも全力で楽しむ人であった。社員、同業界の人とサーフィンや旅行に行くのが日常で、彼にとって好きな場所で好きな仕事をするのが信条だったようだ。最近では「Well-being」のような肉体的・精神的・社会的な満足状態を表すような言葉が目目されるが、業界内では父がいち早くその精神を実践していたと聞く。

父は自然と触れ合うことで廃棄物ビジネスと地球環境は通じ合っていると感じ、自分の仕事の必要性を実感したいと言っていた。そして、3Kと言われる業界のイメージを変革し、後輩や若手社員が誇りを持って働けるようにするのだと言っていた。



著者
白井エコセンター株式会社
取締役

白井美菜

休日に家族で表参道に外出に行く際は、必ず街のごみ袋をチェックしていた。表参道では、ありがたいことに白井のごみ袋を使ってもらっている企業があるため、白井のごみ袋をよく見かける場所でもある。お洒落に着飾った人が通る中、屈みながらiPhoneでごみ袋を真剣に撮る父とは距離を置いていた。いよいよ不審者だと思われそうになると「もう行くよ!!」と半ば強引に連れ戻していた。

レストランに入るとこちらの話は聞かずに考え事に耽り、何かひらめいたかと思えば、ナプキンにメモをしていた。今の白井グループのロゴもこのように生まれた。

ここで父の生い立ちと当社の成り立ちについて、触れたいと思う。白井徹は1965年に4人兄弟の末っ子として生まれた。小さい頃からお調子者で、落ち着きがなく悪戯をしてよく怒られていた。祖父からは「徹だけ近所の酒屋で買ったウイスキーのおまけで付いてきた子供」と言われていたらしい。本人もその冗談は酷すぎると笑っていた。

さて、私の祖父は白井運輸という家庭ごみを収集する会社を営んでいた。もともとカツオ漁の網元の家に生まれた曾祖父が船酔いに耐えられず東京へ行ったのちにつくった会社である。

当時東京都（東京市）は養豚場を運営しており、「餌となる生ごみを市中から運んでほしい」という呼びかけがあった。曾祖父は駆け落ちした妻との生活のために生ごみを集めて持って行き運送料をもらったと聞いている。その後運送屋さんとして商売することになった。

戦争中はガソリンが調達できなくなり、車の代わりに牛馬車でごみを集めることになった。また東京が空襲で物流が機能なくなると、軍からの「どうしても荷物を運んでほしい」との要望を受け、空襲の中、牛と一緒に物資を運び、家族の生活を支えたい。

曾祖父は家族を支えてくれる牛を大切にかわいがっていた。牛が物資を運べなくなると屠殺場に連れて行かなければならなかった。「その時の牛は自分の運命を分かっている、目を見たら涙を流していた」と苦しそうに語っていたとのことで、祖父の物語を聞いてきたから、父・徹は動物を飼うことを「いなくなったら悲しい」と猛反対していたのを覚えている。

父は高校から極真空手を始めハワイの試合で母と出会い、その後ハナエモリインターナショナルに就職をした。寝坊で大遅刻をしたがトークと瓦割りパフォーマンスで森英恵社長に気に入られ奇跡的に内定した。当時は1か月に数回ほどしか家に帰れないような生活の中、ファッションショーの企画に励み3年勤務した。

祖父は「お前の席はない、家業に入るな」とは言っていたが、のちに癌を患っていた祖父の体調が悪くなっていたのもあり、父は1990年の25歳の年に祖父の会社に入るようになった。

【続く】



幼少期の白井徹と白井運輸の看板